



今月の御聖訓



Handwritten calligraphy of the month's message, written in vertical columns from right to left.

正月の一日は日のはじめ、

月の始め、としのはじめ、

春の始(め)。此をもてなす

人は月の西より東を

さしてみつがごとく、日の

東より西へわたりてあ

きらかなるがごとく、^(徳)とくも

まさり人にもあいせられ

候なり

【十字御書 全集一四九一頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
年頭の挨拶	尾林弘三 2
お講講話 道心こそ宝なり	菅野憲道 3
読書案内 『愛鳥自伝』	松田銘道 9
講演 〈柔和質直なる信心〉	神屋正明 10
ちょっと寄り道⑩ 〈テキストづくり〉	森田観道 14
【寄稿】 〈大作さんはユダヤの使い走り?〉	山田絢子 15
訃報 陸月詠草	18
天地つかの間〔その⑩〕	成田詳道 17
恵日だより 一仮処分裁判実質勝訴—	18
恵日俳壇 1月の行事 年回表	

新春偶感

菅野憲道



新年あけましておめでとうございます。

昨年の阪神大震災とオウム真理教の事件に象徴されるように、時代は大きな変わり目を迎えております。政治・経済・社会等あらゆる分野で、体制疲労がおこり、原理原則の再検討をも求められる状況になっていきます。

ところで、私たちは昭和五十二年に起こった創価独立路線なるものの本質が、宗祖の仏法に似て非なるもので、日本の将来を危うくし、日蓮正宗の存立をも左右する危険思想であることを訴えて、正信覚醒運動を起こしたのですが、その後、池田学会を擁護する阿部詐称法主との対立という事態に立ち至り、ついに宗門が二分化されてしまい、運動は宗門覚醒をもめざすことになったのです。

また、創価学会のもつ政治性が、民主主義の根底を揺るがす、きわめて危険なものですから、その改革を迫り、学会首脳も政教分離の方向で体質改善をはかることを約し、一時は成功したかに見えたのですが、一切の約束を反故にして反撃に転じてきた結果が、阿部師取り込みと正信覚醒運動の弾圧ということでした。

ところが、近年阿部日顕師と池田大作氏が覇権を争って醜い紛争をはじめにいたりしましたから、問題はより複雑化して、門外の人には、正信覚醒運動などといっても、なかなか説明できない状況となっております。

しかも、事態は我われが指摘し、憂慮したようになってしまった。宗門・学会や、日本の政治状況が、現在のような迷走状態にはいつてしまったのは、よく考えてみると不思議でも何でもない。このような混乱の背景にあるものは、マキャベリズムであり、エゴイズム以外の何物でもない。結局、我われがめざさなければならなかった覚醒運動の対象とは、拝金思想やエゴイズム、管理社会や無宗教主義など、非仏法的なものがうずまく戦後社会の思想状況そのものだったようです。

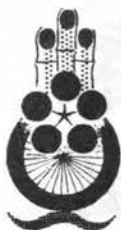
昭和五十二年に起こった正信覚醒運動も、はや十九の春秋を数え、予想だにもしなかった激動の歳月を送ってきた。しかも、私どもの信力行力のいたらぬゆえか、なお寒風は厳しく、正信の春はまだ遠い。されど、宗祖は仰せられている。「冬は必ず春となる」と。

いかに寒風が吹きすさばうとも、悲観することはあるまい。法界はすでに春である。

護賀新年

年 頭 の 挨拶

講頭 尾林 弘三



源立寺法華講の皆様、平成八年の新年を迎えられまして、おめでとうございます。

昨年は、阪神淡路大震災で被災した源立寺の修復に、絶大なるご支援を賜り誠にありがとうございました。工事は周辺の整備が遅れており、春頃の完成となるはこびです。

さて、世間に目を向けてみますと、「立正安国論」に、

「世皆正法に背き、人悉く悪に帰す故に、善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還りたまわず、是を以って魔来り災起る」（全集一七頁）

と仰せのように、オウム事件、金融不祥事、汚職、いじめ問題等、世相の乱れより起る事件が、毎日のようにニュースになっております。

一方、正月にはマスコミの宣伝に乗せられて、普段宗教に無関心な人々が、神社・仏閣に現世利益や欲望の充足を求めて、初詣に出向いています。これらの現状をみる時、今こそ日蓮大聖人の正法正義を、宣揚すべき時であろうと強く感じます。

私たちは「護法」の精神を堅持し、

「法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊し」（全集一五七八頁）

と御金言にもある如く、仏法を正しく護ることに勤めてまいりました。

正信会の活動方針、「青年を育成し正信の継承を」また、南近畿法華講のスローガンである、「伝えよう正法、託そう信仰」を掲げて、取り組んでいます。

横綱貴乃花が、横綱に推挙された時、「不惜身命で相撲道に励みます」と法華経を引いて誓いの口上を述べましたが、他門に属する人ながら、現在立派な成績で相撲を取っておるのを見るにつけ、我らこそその思いを強く致します。

どうか皆様も、年頭に当たり誓願を起し、法燈相続に令法久住に向けて精進し、本年を成果のある年にされますことをお願いいたします。

お講講話(要旨)

拝読御書

「松野殿御返事」

(全集一三八六頁)

道 心 こ そ 宝 な り

菅野 憲 道

《入信動機のボタンの掛け違い》

「ボタンの掛け違い」という言葉があります。洋服のボタンを最初に掛け違えると、全部ずれてしまいます。建物を作ったり、あるいは裁縫などでも、最初にどこかでずれたまま作業を続けていくと、最後の方では全く合わず、結局元のところに戻ってやり直すハメになってしまいます。

宗教も、本来は「自分とは何か」「いかに生きるべきか」といった菩提心・真実心をもって求めるべきものでありますが、悲しいことに人間は弱いものですから、病気で不安な時や人間関係で悩んでいる時などに、宗教団体の勧誘にあって、悩みが即座に解決するなどといった甘言で誘われると、「溺れる者は藁をもつかむ」心境でつい引き込まれてしまう。そのあげく、宗教に無知な人が右も左も分からないまま、閉鎖的な集団の中で、誤った洗脳教育をされてしまうことがあります。特に最近では、カルト教団とかマインド・コントロール等という言葉が流行語になるぐらい社会問題化しております。

しかしこれは、信仰に対する出発点からしてずれているのであります。宗教とは、「宗」とする「教え」、即ち人間の根本の教

えでありまして、その人の人生観や価値観を形成する基本的な拠り所でありますから、宗教の正邪の判断や信仰の選択にはしっかりした主体性が求められるのであります。

また信心に対する姿勢も、生死の問題や、成仏という真実の道を求めるところにあるのですから、それ相応のまじめな心がけが必要になると思います。

仏道を求めるということにおいては、虚飾とか打算から離れ、正直に、己れを空しくして正法を求める厳しさが要求されるのであります。これが「師厳道尊」ということであり、法華経に

「我れ身命を愛せずただ無上道を惜しむ」とか、

「一心に仏を見たてまつらんと欲して、自から身命を惜しまず」と説かれるように、あくまで謙虚でまじめな道心が要請されるのであります。

一般仏教でもよく「無我」ということを強調しますが、自分の我欲・我見といったものを投げ出して、己れを空しくしなければ、仏道修行にはならないのであります。ちょうど器の中の腐った汚水を捨てなければ、浄かな清水を入れられないように、エゴを投げ出して、正法に殉じ、正義に生きる姿勢があつてこそ、六根清

浄という功德を得られるのであります。己れのエゴを投げ出すという姿勢によって、かえって清らかな真の自己を発見し、真の自分を生かすことができるのであります。

しかし、最近の宗教団体はそうではなくなっているところに問題があるのです。個人のレベルでも教団のレベルでも独善的になって、エゴの固まりのようになっていく。信心という名のもとに、我見・我欲をふりまわし、他人のことなどお構いなしという姿になっていく。口には他者への愛とか、利他の精神を説きながら、現実には教団の勢力拡大や利権保持に汲々としているのであります。とくに創価学会などでは「生命力を強くもって相手に負けないように」などという指導を行い、「確信をもって」我を押し通すことを奨励しております。とにかく相手を言い負かす強引さだけが教え込まれ、およそ信仰者につきもの求道心や懺悔の姿勢など全く見られないのであります。自己中心的な賤しい命を強めたり、汚いエゴの生命をむき出しにしていけば、世間的には一時は競争に勝って利益を得ることができるとも思いますが、その人の人間性は荒廃し、その精神世界は修羅や餓鬼の状態になってしまふことに気がつかなければなりません。

《私権化する宗教》

「松野殿御返事」の冒頭には、我われ僧侶にも非常に厳しいことが書かれています。直接的には、当時の墮落した仏教界や僧侶の姿を述べられているのですが、

「末世には、狗犬の僧尼は恒沙の如しと仏は説かせ給いて候なり。」（全集一三八一頁）

と警鐘をならされています。

既に、鎌倉時代には仏教界の墮落がはじまっておりまして、例

せば後白河法皇の、

「わが心にかな

わぬものは賀茂

川の水、双六の

賽の目に山法師」

という有名な言葉

が物語るように、

比叡山・興福寺・

東寺等の寺社勢力

が、いわゆる僧兵

という集団を組織

し、寺社の特権を

守るために圧力団

体化して朝廷に強

訴するという状況

がありました。

南都北嶺の諸大

寺は非常に大きな封建領主でしたから、その特権を守るためにし

ばしば朝廷に強訴が行われました。その権益を少しでも犯したり

すれば、それは仏法をないがしろにする、神威を恐れぬものであ

り、王法の衰え・亡国のもとという論理で、強引な圧力をかけた

のであります。しかも、寺院の中にあっても、地位や役職を私物

化したり、一家一族で独占して利権集団化し、有力な庇護者の奪

い合いを演じていたのであります。

国家仏教としてはしまった奈良・平安の仏教には、世襲制などほとんどなかったのですが、平安末期ぐらになると世襲化され、ある一定の家柄とか一族が教団の中の一定の地位や役割を独占す



強訴する山法師を描いた屏風絵

るように制度化され、教団が一族の私企業のようになっていたのです。たとえば熊野の御師が一定地域の信者を売買したり、天台宗や真言宗では法門や修法まで一家の相伝として売買の対象にしたりしております。こうした実例は枚挙にいとまがありません。現に今でも、東大寺や法隆寺などの管長は、七・八軒ほどの院家（塔中）によって盥回したらいにされていて、それ以外の人は絶対に管長になれないようです。公のものだった伝統教団はいつの間にか特定の人々の生活するための手段、ないしは利権の対象となってしまう、形骸化していったのです。

また当時の新興の集団も遊行僧や一向宗・高野聖・修験僧などほとんど仏教教理のなんたるかも知らない「にわか出家」が、生きるたつきを求めて庶民層にくいこんで、占いやまじないの類・祈祷修法を専らとし、信者のとりあいをしていたのであります。「高野聖に宿賃すな」という言い伝えが残るように、生活のためには何でもするいかがわしい修験者や遊行僧が世にはびこっていたのであります。

《大聖人の目指されたもの》

このように、宗教に携わる人々に真実の心がなく、己れの名聞名利を求めて奔走するといった傾向は、既に鎌倉時代からあったのですが、日蓮大聖人こそは、このような世間の風潮に背を向けて、仏法の真実の道を求め行動されたのであります。

大聖人様は清澄から叡山に遊学された学僧で非常に優秀でありましたから、安房に帰って清澄寺の別当への就任要請を請けたのであります。全くと見向きもされておりません。門下の日興上人なども、幕府の帰依のあつかった四十九院の供僧でしたから、そのまま続けておれば、やがて院主・別当にまですすんでいたのでは

はないかと思われます。

しかしながら、そのような寺院や教団の中での立身出世は、世俗の名聞名利と同じことです。一顧だに与えられなかった。それよりはただひたすら真実の道、本當の仏法を求め実践することに生涯を燃焼せられたのであります。

このような名聞名利に全く恬淡てんたんとして欲がないような人々……、即ちはつきりと自らの人生観・価値観を確立していた宗教者たちは、実は大聖人様とその門下だけでなく、他にも明恵上人とか良寛さんなど、歴史上にはたくさん見ることが出来ます。

道元にも有名な話が残っております。越前の永平寺で修行していた時に、鎌倉幕府から自分たちの師範としてお迎えしたいという話が持ち上がったのです。鎌倉から使者として弟子がやってまいりまして道元に伝えたところ、道元はその弟子がこの話をさも嬉しそうにいうものです。その名利の心を見抜いて即刻破門にしてしまったそうです。そのうえ名聞名利の心を修行に妨げになる汚らわしいことだとして、使者の弟子が座った床をはがしたうえ、土を三尺掘って捨てた、という話が伝っております。

今の世の中には自分だけが目立ちたがって、偉くなりたいという強い人間が多いのですが、かつての日本には名聞名利に恬淡として農事・職工・芸能などを天職として一心に打ち込んだ庶民がずいぶん多くいたようであります。そして、そういう伝統を支えていたのが、実は彼らの信仰心ではなかったかと思うのであります。

また、それらの人に、世俗の一般的な価値である財物や権力以外に、もっと大切なもの、道心という尊い財があることを気づかせてくれたのが、仏教者の大きな役割ではなかったかということであります。



大聖人かされた説を求め道の現実

《経済至上主義の落とし穴》

しかし、そうした伝統は絶え、右を向いても左を見ても欲の深い人間ばかりで、自分の懐を肥やすことだけしか考えていない人が増えてきたところに、今の時代の不幸があると思うのです。その理由としては、戦後の社会を支配してきた経済優先主義が影響していると思えます。

戦前の日本は、欧米の植民地支配への対抗から、産業を振興して軍備を増強す

るといふ富国強兵の政策がとられ、国民からも支持を得ました。やがて国家主義が台頭し、神国日本の神話を信じて、世界中を相手に戦争をはじめるまでにエスカレートし、ついには国家滅亡の危機に瀕するまでになってしまいました。

戦後の再出発は、日本全体が食えることが出来ないどん底の飢餓状態でしたから、何とか産業を起こし、経済を発展させ、株式会社日本を発展させて、明日の生活に困らないようにしようという国民的合意があったようです。

しかも焼け跡の闇市のどさくさから戦後経済の再建がはじまり、ずいぶんいい加減なビジネスが行われてきたわけです。個人としてならどうかと思うようなことでも、会社の仕事なら善であると

して、詐欺まがいの商売でもビジネスとしてゆるされるような風潮があり、会社の発展＝経済の発展＝社会的繁栄という図式のもとになりふり構わずやってきました。そして、それが緊急避難的な意味を持ち、発展途上にある間は良かったのですが、ある程度の経済的な豊かさが達成されてしまいますと、もう経済優先・企業優先ということは意味をなさなくなったのであります。それです。いつまでも経済優先の神話をふりかざしているところに現代日本の病根があると思うのです。

《変質した全体主義》

また、天皇が人間宣言をし、かつての国民の精神的支柱であった神国日本は消滅したのですが、急には切り替えが出来ず、その代わりを会社組織や宗教団体に求めていったようであります。

よく言われることですが、戦後日本には、佼成会・天理教・霊友会、それに創価学会などの新興宗教が次々に勢力を伸ばし、「神々のラッシュアワー」などと言われたものです。その背景に、戦後の精神的空白を考えないわけにはいきません。今まで「お国のため」と思って自分の全人生を掛けていた対象を喪失してしまつたのですから、それに代わる精神的よりどころとして新興の宗教団体や会社組織に滅私奉公する人々が、いっぱい出てきたのも無理からぬところでしょう。

これらの集団を貫く論理は、戦前の精神主義が否定されて、とにかく一生懸命働いて結果を出すことで、会社を大きくし、給料を増やし生活を安定させるという現実的な利益追求を第一にする成果主義、数値信仰があるようです。

会社はもちろん、宗教団体でもそうでした。営業マンの販売戦略と新興宗教の布教作戦は似たり寄つたりのもので、グラフで数

値目標や実績を掲げ、全てのエネルギーを会員獲得にそそぎこむのです。教団の成長期には信者をふやして教団を拡大することが、自分たちの地位や収入の向上につながるのですから、幹部はもちろん末端の信者まで、現実的利益（名聞名利）の為に会員獲得に血道を上げることになるわけです。個人は組織に埋没し、教団に管理されて、閉鎖社会の中だけで考えたり行動したりしますから、やがてどの信者も教祖そっくりの言動をとるようになってしまいます。

戦後新興の宗教団体は、ほとんどが軍隊式やネズミ講式のやり方を取り入れ、企業の経営的方法を取り入れました。ですから、名前は宗教団体ですが、中身は何ら営利企業と変わらない状況が続いてきたのです。霊友会など博報堂にマーケティングからイベントの企画まで依頼しているということもあります。

《宗教法人問題の本質》

今の宗教法人法の改正論議などをみても、結局、大きな宗教団体の幹部達が既得権を守ろうとして反対を唱えているようです。宗教団体には、公益法人としての色いろな特権が与えられていますが、反対するこれらの宗教団体にいったいどれほどの公益性があるか疑問です。免税をはじめ各種の法律的な優遇を受けながら、閉鎖的で秘密のベールに包まれた現在の宗教団体が、専制的な教団体制を守り、利権を守ろうとしているのは明らかです。

宗教団体が、本当に世の中を良くしたり人々を救おうというのであれば、公正な教団運営をするのが常道で、ある程度の透明性の確保とか、内部情報の公開は当然であると思います。自分たちの活動や理念を秘密にするのではなく、逆に社会に対して堂々と公開し、社会の模範になるべきでないでしょうか。それを、鉄の

カーテンを作って、なるべく外には分からないように密室でこっそりやっているのは、他人に見られてはまずいことをしているからだろうといわざるを得ません。詐欺まがいの巨額な金集めや王侯貴族のような贅沢三昧、二枚舌を使いわけての洗脳教育など、公開できないのは当然でしょう。

そして反対者のいうことは、宗教弾圧だ、信教の自由の精神を踏みにじるものなどという大げさなものがあります。果たして宗教法人法を少し改正しただけで信教の自由が犯されるものかどうか、誰が考えても分かるのではないのでしょうか。

それよりも何よりも、真の宗教者は、世俗の法律如何にかかわらず自らの自由な主体的精神にたって信仰を求めたのであって、国が認めるから信仰するということのようなものではないはずで、国王不拜という仏教の伝統が示すように、国家権力による管理隷属を拒否し、世俗の価値世界と次元を異にする内面の精神的自立性を重んじてきたのが宗教的偉人に共通する姿でもあります。

日蓮大聖人は、

「身をば従い奉るようなれども、心をば従い奉らず」

と申され、我われが現実世界に生きる限りは、社会や国家の規制を受け、そのルールに従うのであるが、真の自由なる精神は、決して法律によって達成されるものではなく、内なる主体的精神の如何によるのであるとされています。

宗教団体が、一方ではその利権を拡大せんがために権力に迎合したり、権力奪取を企てながら、一方では政教分離の法律で利権を守ろうというのは余りにも虫の良い話です。

《真実の道を求めよう》

正しい信仰とは、名聞名利を捨てて、真実の道を求めることで

す。そして、その真実の道を求めることの実践とは、一言でいえば「慈悲」ということだと思えます。

慈悲とは、伝教大師が、

「悪事を己れに迎へ、好事を他に与へ、己れを忘れて他を利用するは、慈悲の極みなり。」（「山家学生式」）

といわれているように、利他の精神でもありません。即ち、自分の

天台は華宗を不學也一語

國實何物實道心也者道心人名為國實故
古人言便寸十枚非是國實也千一隔此
則國實古指又云能言不能行國之師也
能行不能言國之用也能言能行能言國之
實也三品之内唯不能言不能行為國之
賊乃有道心佛子而稱善善東号君子思
事向已好事與他志已利他慈悲之極行
教之中出家二願一小乘願二大乘願道
心佛子即此願新令我東州但有小像未
大願天道小私大人能與誠願 先帝
御願天台年小承為大願為善僧也
則王夢願九位列落覺母五寫履三
增敷斯心新願不忘渡海利今利後思
切無窮

年小度者二人

凡法華宗天台年小自弘仁九年承朝于
履際ハ為大衆願不除其籍名賜如虎子
号校園十善戒号善直沙鉢其度傳請

己れを忘れて他を…（伝教大師筆「山家学生式」）

ことは出来るだけ
後回しにして、皆
が立つようにして
いくところに、本
当に仏法者として
の生き方があると
思うのであります。
ですから自分の教
団の都合ばかり優
先して、公益を考
えない宗教教団は
宗教ではありません
ん。

今日日蓮正宗な
ども、学会の独裁

的で組織中心的な悪信仰に、深く汚染されてきたようです。阿部
法主個人が宗教的権威はおろか、教団の人事・財政・懲罰の権限
まで一手に握り、徹底した管理・圧制をしているのですから、
宗内にいる僧侶は、けして内心の疑問や本音をいうことはありま
せん。宗務院の公式の見解をくり返すばかりです。阿部師が「俺
が頭でおまえら凡僧は手足だ」などと公言し、教団を軍隊組織の

ように考えているものですから、僧侶も次第に命令の伝達者にな
ってしまふ。そして自らは求道心もなく、ただ教えてやる、拜ま
してやる式の権威主義に墮してしまっています。「身のために之
れを申さず世のため、法のため」といって国を諫めてきた富士門
流の精神などはほとんど忘れ、自分の教団のことしか考えない閉
鎖的集団に成り下がってしまいました。

しかし、国家権力の弾圧も恐れなかった日蓮大聖人の門下が、
たかだか自らの所属する教団組織に管理され、主体的精神を失う
ようでは、道心も信仰もありません。

もともと大聖人の仏法は、けして我われの私有物ではありません
んし、誰かの専売特許でもありません。一切衆生のためのもので
あります。「信は公物」ということを日有上人も仰せられていま
すが、真理とか信仰というものは特定の集団や個人が独占できる
ものではないのです。それを恰も自分たちが独占しているように
錯覚しているところに、大きな間違いがあると思うのです。

むしろ、宗我心（宗派エゴ）を離れて自分たちの所属している
集団や組織の、良いところや悪いところが、経文や御書に照らし
て正直に見れるようになれば、そこに必ず真実の仏道が見えてく
るものと思えます。

とにかく現代の宗教団体は、その本質は世俗の集団と変わるこ
となく、かえってよそからの規制を受けず、自浄作用もないため、
世俗よりももっと俗っぽくなっているという状況のようです。

このような中において我われこそは、どこまでも道心を忘れず、
何とか世俗の名聞名利の垢を流して、富士の清流を取り戻すべく、
真の仏道に精進していきたいものであります。

南無妙法蓮華經

昭和九年に「日本野鳥の会」を創立した著者の自伝である。月刊誌『アニマ』に四十四回に亘って連載され、延べ原稿も千三百枚にも及ぶ大著であるが、その奇異ともいえる著者の一生を、豊富な話題と洗練された文章で綴られていて、読む人をして少しも飽きさせない。

悟堂という名前から想像できるように、いまは蕎麦そばで有名な深大寺で十五歳の時得度。その後、僧道からかなりはずれ、文学を志す。とくに歌人・詩人として活躍するようになる。しかし、著者の興味は文学の世界のみにとどまらず、自己を見つめ直す木食生活に入り数匹の蛇なども生活をともにするなど、徹底した昆虫等の観察を通じて、自然への愛着を深める。木食生活から離れた後も淡水魚や野鳥などの観察を続け、自然との共生を実践する中で、著者独特の自然に対する崇高な哲学をも築き上げた。

それは飼鳥ブームへの批判もこめて雑誌『野鳥』を発足させる時、著者が自分自身に問いかけた雑誌の存在理由によくあらわれている。自伝の中でそれを次のように要約した。

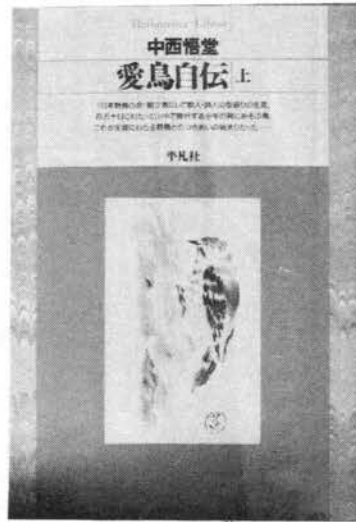
①日本古来の「飼鳥」の悪習を根こそぎ追放する使命を雑誌に持たせたい。

②自然の山野の鳥からそのまま精神的慰藉いしげを受けるだけの風習を作り上げたい。

③山野の鳥をそのまま楽しみみかつ尊重する

読書案内

松田銘道



中西悟堂著

『愛鳥自伝』上・下

平凡社

定価 各一五〇〇円

ことは、そのすみかである山川草木を尊重することにつながる。すなわち自然尊重の気風の作興ともなる。

④鳥を触体として、誌上で芸術と科学を協調させたい。……いい文化が内にあつてこそその文明でなくては、外づらは豪華でも、心は痩せて貧しい砂上の楼閣に過ぎまい。

⑤こうあつてこそ人生は浄化され、人間は豊かになる。それにはその芯となるべき高い宗教性を深奥のともしびとしたい。著者自らこのことに対しては「欲張りな夢想家と笑われもしようけれど」と遠慮した言い回しをしてはいるものの、つねにこの理想を懐きかつ実践し続けたことは、雑誌とともに発足した「日本野鳥の会」の會長に四十才で就任してより、八十九才で死去するにまでの半世紀を、野鳥をはじめとする自然保護の仕事を果敢にやり通した、その氣迫溢れる生き方が何よりも明確に証明している。その間、「野鳥」「探鳥」などの言葉も著者は創り出しているが、「野鳥」にしても「飼鳥をなくしたいばかりに一月、二月と、拳に汗を握り、脳髓をいじめぬいた惨憺たる苦心の結晶」によつて生み出しているように、鳥に関する研究と実践は、人並みはずれた一種の達人ぶりを発揮した。

(正覚院主管)

南近畿法華講大会講演

平成七年十一月二十六日(日) 於 広宣寺

柔 和 質 直 なる 信 心

正蓮院 主管 神 屋 正 明

本日は、南近畿教区の法華講大会に当たりまして、お招きいただき大変ありがとうございました。ありがとうございます。

本年初頭の、あの大事事をもたらした、阪神大震災によつて被災しました正蓮院の僧俗に対し、皆様方の心暖まるご支援を賜り、大変ありがとうございます。心より厚く御礼申し上げます。お陰様で、被災した正蓮院の信徒の方々も、徐々に復興に向かつて頑張っています。また、平成二年に、正蓮寺三代住職であり、私の師匠でもあつた岩瀬正山師の逝去により、正蓮寺を明け渡した、私も正蓮院の僧俗の悲願でありました、菩提寺建立が、この八月六日に無事落慶法要を奉修することが出来ました。これ偏えに、仏

天のご加護の賜物であると拝しますとともに、正信の僧俗のご支援・ご高配があつたればこそと、深く感謝申し上げますのであります。

この一年、私の身の回りには、悲喜ごもごもの出来事があつたことを、皆様方に御礼のご挨拶を申し述べる中、今更ながら実感として感ずる次第であります。

私も、人の常として、楽しいこと・良い出来事は、何時までも記憶の中に止めて置きたいと願ひ、反面、悲しい出来事・忌まわしい事柄に対しては、早く私の記憶の中から消え去つて欲しいと思ひます。本年一年の様々な出来事は、良きにつけ悪しきにつけ、終生忘れることのできない出来事として、私の記憶の中から

消え去ることはないものと思ひます。

かつて、五木寛之という作家が語つていたことですが、昭和四十五年位に福井の方で、アルコール中毒の患者が急増したそうです。そのことを、不審に思つた五木寛之の友人の精神科医が、アルコール中毒の患者と個別に面談して、なぜ貴方は、アルコール中毒になるほどに、お酒にひたるようになったのかと問ひますと、大方の患者の答えるところは、昭和二十五年に起きた福井大地震の、あの忌まわしい恐ろしい記憶が二十年経つた今でも、なお忘れることができずに、ついつい酒の力に頼るようになり、この様な状態に陥つてしまつたと語つていたと、五木寛之は友人の精神科医の話を紹介し

て、地震の人間に与えるすさまじさを、切々とラジオで語っていました。

私には、小学校一年になる子供がいますが、その子は、今でも阪神大震災の余震が起きますと、泣き叫び、母親にへばりついて離れようとしません。その子が、子供ながらに、

「私は、地震で家が潰れ、いっぱいあった玩具がなくなり、避難所生活をしていっばい悲しい思いをした。」

と、何気なく語る時があります。「いっばい悲しいことがあった」と言う子供の言葉を聞いたたびに、私は、ゾッとさせられます。この子は、あの忌まわしい地震の恐怖を一生背負って生きなければならぬのかと思うと、親として子供が不憫でならない思いに立たされます。

また、今被災地では、復興作業が急ピッチで押し進められています。復興が一段落し、被災者が新しい家に移り住み快適な生活が始まって、果たして、あの忌まわしい地震の記憶が、被災者から消え去るものだろうかと考える時、やはり、



倒壊した旧正蓮院の前で

あの福井大震災を体験した人たちと同様に、阪神大震災の恐怖は、いつまでも被災者にまといつくのではないかと思えてなりません。

法華経の寿量品の自我偈に、「我が浄土は毀れざるに、而も衆は焼け尽きて、憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充満せりと見る。是の諸の罪の衆生は、悪業の因縁を以って、阿僧祇劫

をすぐれども、三宝の名を聞かず。諸の有ゆる功德を修し、柔和質直なる者は、即ち皆我が身、此に在って法を説くと見る。」

と説かれています。

過日、NHKラジオが、阪神大震災で何を感じましたかというアンケート調査を全国規模で実施したところ、大自然の脅威にさらされた時の人間の無力さを感じた、と答えた人が九割以上あったと報じていました。

阪神大震災を体験した人の全ては、地震の体験を通して、大自然に対する脅威とともに、人間の無力さをイヤというほどに見せつけられたのではないかと思えます。そして、被災した多くの人は、地震の恐怖から逃れることなく、常に地震の恐怖と隣り合わせて生きなければならぬとするならば、これほどの不幸はないと思わずにはいられないのであります。

しかし、前に紹介しました自我偈に、仏様は「我が浄土は毀れざる」と説かれ、



新築された正蓮院（『継命』より）

更には「我が身此に在つて法を説く」とまで仰せになられるのであります。

私たち信仰者の願うところは、申すまでもなく、仏様にお目見えしたいということであります。何故なら、私のような罪なるものでも、仏様に見え^{まみ}ることが出来るならば、必ずや仏様は平等大慧の大慈大悲を以てお救いいただけるものと信ずるが故であります。

それでは、いかなる方法で仏様の御前に見え^{まみ}ることが出来るのかと、自我偈のご文を押しますと、「諸の有ゆる功德を修し、柔和質直なる者は」と説かれてい

ます。そして、この「柔和質直なる者」とは、やわらかく（柔）・なごみ（和）・まっすぐ（質直）なる心根にある者という事ではないかと考えます。

その柔らかく和み真つ直ぐなる心根と、私たちの日々にある心とを較べてみますと、私たちの日々ある心には、この競争社会のなかで、常に人と競り合いハラハラした、頑^{かたく}々な肩肘を張つた窮屈な心しか見いだすことが出来ないのではないかと思います。

法華経には「大地が六種に動ずる」ということが、随所に説かれています。そのことを天台大師は、
「地の六種に動ずるとは……今は復一切の人の六根を動じ、清浄を得せしむることを明かすなり。」

と釈せられています。私たちは生きる上で、六根という眼とか耳・鼻・舌、さらには全身でこの世界と交わり、心に様々なことを感じ私というものを築いているのであります。しかし、その様な私というものは、本来の私ならざるものであり、

三世の生命の私というものではないと考えます。

私たちはたえず忙しい忙しいと言って、何物か分からない他者によってはやし立てられて、自分らしい生き方・人生を見つげることなく歳を重ねます。「忙しい」という字は、立心偏^{りっしんぺん}に亡くすと書きますが、「忙」という字が示すように、忙しいということは、心を滅ぼす所業であり、忙しい中にある私たちは、まさにあわただしい時代の流れに流される、本来の私ならざる私というものでしかないのです。

その様な私ならざる私を、私たち凡夫は絶対の自己と思ひ込み、そして、自身の六根に感ずる瞬時に移り変わる世界の中で、悲喜こもごもの日々を織りなしているのではないのでしょうか。その様な私たちであつてみれば、大自然の脅威の前では、まことに、あつけない儂^{はかぬ}い無力な存在でしかないのであります。

しかし、私たちには、信仰という崇高な生き方を願う心というものがあります。



その崇高な生き方を願う信仰の姿勢を大聖人様は、御書に、

「苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思い合せて、南無妙法蓮華經とうちとなへみさせ給へ。これあに自受法樂にあらずや。いよいよ強盛の信力をいたし給へ」(一一四三頁)とご教示なされているのであります。

本日の大会の実行委員の方々のお計らいで、私の関連した出来事がパネルで掲載されていましたが、私自身色々なことがあり、何故私だけがという気持ちにも立たされたことが今まで度々ありました。

しかし、あの阪神大震災で広宣寺様始め南近畿教区の各御尊師方、並びに多くの正信会の僧俗のご支援ご厚情に接した時、この大惨事を、なんとか自身の信仰の上で受けとめたいと願いました。

私たちは、信仰者として、怒濤のように襲い来る人生の大きな壁にぶち当たり、もはや自分の力量・裁量というものでは、どのようなにも足搔けない窮地においやられた時、信仰者として自然に手を合わせ、仏様の存在に對し奉り、深く頭を垂れることが出来るのではないのでしょうか。

その時には、もはや仏様と私たちを隔てる何物もない、まさに仏様と手を合わせる私たちとの一体のなかにある心こそが、「柔和質直なる者」と自我偈に説かれる、仏様の法を説く姿を見ることが出来る者の姿ではないかと考えます。

また、人間として崇高な生き方を願う信仰の面から立ち返って考えるならば、私たちの生きるこの忍土と呼ばれる娑婆世界は、信仰の修行の場であり、そこに怒濤のように襲い来る全てのことも信仰

の糧と、受けとめることが出来るのではないかと考えます。

即ち、自我偈に「諸の有ゆる功德を修し」と説かれるところは、この苦しみに充ちた土である娑婆世界で、一生懸命生きんとする中に起こる全てのことは、全てが信仰の上で大切な「功德」として活かされるということを言われているのではないかと思うのであります。

私は、阪神大震災の大惨事を体験して、信仰とは人間の存在のぎりぎりのところに残された最も大切な尊いものである、と感じました。そして、私自身が被災者と同じ立場で、私の感じた信仰に対する尊さ、なかならず大聖人様の教えの尊さを語っていかねなければいけない、との使命すら感じているのであります。

何卒皆様には、被災者を励ますお言葉のその中に、信仰の大切さをお話し下さるようお願い上げまして、話を終わらせていただきます。

最後までご静聴ありがとうございます。

テキストづくり

伯耆の里 もりたかんどろ

いま、手元に残っている「パソコン教室計画案」(昭和六二年九月)をみると、かなり張り切っていたことがわかる。知らぬが仏とはこのことか。改めて読むと

冷や汗ものだが、その一端を転記する。

・キャッチフレーズ

最強、最新のソフトでビジネスに即応。

・目標

終了時までには、パソコンが楽しく、自在に扱えるようにする。

終了時までには森田と同じレベルにする。

・具体的な内容

パソコンに対するアレルギーをなくす。ブラインドタッチのマスター。

ワープロソフト、表計算ソフト、データベースソフト、MS-DOSの基本

のマスター。

そのほか一〇項目ほどが列記されている。

その後、ほぼこういう方向で進んだが、今までの二人で一台のパソコンの割り当てを、一人一台にあらためた。一〇台だから定員は一〇名となる。これはどちらかが遠慮するようなことをさげ、きつちりと練習してもらうためである。

テキストづくりで気をつけたことは、なるべく実データを使うということだ。

サンプルデータはどうしても架空のデータになりがちだが、多少でも関心を引くように、受ける人になじみの深いデータを使った。たとえば、タイピングの文章

練習では、自分の住んでいる町の紹介文を入力してもらうようにした。これはあ

らかじめ鳥取県中部にある各市町村を紹介した文章をすべて用意しておき、受講

者自身が住んでいる市や町を選んで入力する方法である。

一 太郎でのラベル印刷やロータス12

3や桐で使うデータも、地元の学校とか

病院とかの住所や電話番号をかりて、実データを使った。学校や病院はどんな人でも世話になつていいるから、東京あたりの架空のデータで練習するより集中できると考えたからである。東京といえば、

芸能人の個人データにもお世話になつた住所だけでなく生年月日などは123の日付関数で年齢の計算をするとき、あの

山口百恵さんはいま何歳かとかがわかつて、画面に引き入れる効果が期待できた。

むろん、もつとも関心の高い受講者自身のデータ入力も随所で大事に扱った。

そのほかでは、なるべく色ものを使つたことか。パソコンでは文字や罫線に色

を使い分けられるが、早い段階でこれを紹介すると、パソコンはおもしろいというイメージがつけられる。

テキストづくりは、素材をただ並べるだけでなく、どう料理して食をそそらせるかが工夫のしどころだった。

(大安寺住職)

〔寄稿〕

大作さんはユダヤの使い走り？

山田 絢子



関東平野に木枯らしが吹きすさび、冬らしくなって参りました。

一ヶ月程前に何となく、信濃町の駅前の博文堂書店へ立ち寄ってみましたら、一階の部分は普通の本屋なのですが、地下へ行ってみましたら、ユダヤ関係の本が沢山目について、異様な感じを受けました。

普通の本屋ですと、たまにユダヤとか反ユダヤの本を見かけますが、博文堂では沢山、何冊もかたまつてあちこち置いてありましたので、池田大作は遂にユダヤ教に改宗したのかと思うくらいでした。東京へ来てすぐ、太田竜著の『国賊池田大作』という本を見つけて読みましたが、その中に、

「池田大作はフリーメーソンだ。」と書いてあり、まさかと驚きましたが、

まんざら嘘でもないと思うくらいでした。

学会関係の本より、目立つ感じで、反ユダヤの本は一冊も無くて、ユダヤ礼讃のものばかりで、タルムード礼讃の本や、フリーメーソンが正義の団体であるというものや、『ユダヤ人はなぜ優秀な民族か』という題の本や、ホロコーストや反ナチ、国連礼讃……。ユダヤと非常に密接な関係を持っているとしか思われず、何か空恐ろしい感じを受けました。

池田大作が天下を取ることに、イコール、ユダヤに日本を売り渡すという、何か空恐ろしいことが起こりそうです。

この辺も学会員が多いらしく、私の隣の部屋の人も学会員で、選挙の時応援しているの分かります。休日の夜、よく青年部の幹部らしい人が訪問していて、昨夜は休日でもないのに、十二時前まで

居て、帰る時玄関の外で大きな声で挨拶を交わしているの、すぐ分かります。今学会は、上を下への大騒ぎをしているようです。

初めて近所のお店へ行ってみたら、そのおばさんが学会員で、折伏されたり選挙を頼まれたり……。

「学会は、もう三十年も前に卒業しました。」

とお断りしたら、

「お寺は陰だから魔で、学会は日の当たる陽だから、学会は仏子だ。仏子の悪口を言ったら、仏罰が当たるんだ。」と言ったり、

「この宗教は、謗法さえしなかったら、何をしてるかまわないんだ。女を作る



大作さんはユダヤの使い走り？

うが、酒を飲もうが、一切かまわな
 んです。」

と言つて、

「大勢の人と学会活動して折伏して、
 楽しく信心できるのだ。一人で家で拜
 んでいても功德はない。」

とか、さかんに演説口調で言つて折伏し
 ていました。

「私のお寺のご住職様は、大変な人格
 者で尊敬できる人だから、私は変わり
 ません。」

と言つたら、以後何も言わなくなりまし
 た。私も以後、そのお店へ行くのをやめ
 ました。

学会の言うことは、今も昔も変わらず、
 二言目には「功德、功德」です。牧口氏
 の思想は、ベンサム功利主義の真似を
 したのでしょうか。そうとしか思えませ
 ん。学会は座談会で、功德と罰の洗脳を
 重ねるので、骨の髄まで道徳観念を失つ
 て、人格破壊をされてしまい、利益のた
 めには何をやっても良い、ご本尊様さえ
 拜んでおれば、どんな悪いことをしても
 罪は瞬く間に消えてしまうと、思い込ん

でいるようです。だから学会をやめても、
 中々後遺症から抜けられませんか。ユダヤ
 のタルムードと大変よく似た思想です。
 だから、池田大作はユダヤの使い走り
 的存在になってしまったようにも思えま
 す。
 (槻木地区)

塔婆立ての斡旋

鈴鹿光徳寺のご厚意により、ステ
 ンレス製の塔婆立て(墓地用)を、

一基 一万円

の原価で提供していただけます。

ご希望の方は、受付までお申し込
 み下さい。

なお現物の見本は受付にあります

【訃報】

〔箕面地区〕

常正院法武信士 十二月七日寂
 俗名 井上武夫之霊 行年八十五歳

謹んでご冥福をお祈りします。

【睦月詠草】



〔坂本フミ子〕

浅葱あさつきの 香りほのかな 味噌汁に

夫つまとさややく 語らふひととき

アルバムを 開けば五十路越へ来たる

吾が過ぎ来しこが 語りかけくる

〔橋本義一〕

かえりみて 罪深き身が 今の幸

ただ有難し 法悦の日々

生きてある 印ぞ九度九分 病むもまた

八十路越えければ 有難きかな

〔橋本 円子〕

「マー・マー」と 残留孤児の 叫ぶ声

五十年の空白 如何にせよとや

馬淵晴子に 似し乳母なりき 追憶の

中にて常に ほほえみ給う

談所には特定の規則はないが、西部劇のような無法地帯とはちがう。そのかわり各自の責任判断には、個性というか地金がまる出しとなる。おのずから類は友を呼ぶ。この正月十一日には早くも、新里望道師の三回忌を迎えるが、彼は談所の所員ではない。しかし、志の通じた党類の一人と言えよう。

私は望道師（通称、望チャン）と、そ

天地つかの間

〔その十一〕

成田 詳道

う親しかったわけではない。それは乗り継ぎの悪いローカル列車の時刻表みたいな交友だった。私が埼玉県の朝霞市に居たおり、望チャンは草加市に布教所を開いていた。妙真寺（東京）から古典文法の先生を招き、数名で御書の勉強会を開いているが、都会では定期会場の確保は至難だと嘆息する。それを聞いて私は地元、朝霞市のコミュニティセンターを提

案し、毎月ままと漁夫の利を得た。朝霞は都心に近い新興開発地だから、設備の整った教室を無料開放したのである。

これを機にしばしば、望チャンは私の頭脳に風を巻きおこした。なにしろ博識、雄弁、行動力があって、批判精神が旺盛



桃の花咲く頃、談所にて

するしか術がない。

彼が自分の意見を開陳するときは、遠慮会釈がなかった。正信会に対しても是非々々を立て分け、自分のスタンスを守っていたようだ。彼のような人間を同居できない組織は、先に退廃の道しかなかった。すべからず組織には個性を尊重し、清濁あわせ飲む度量が欲しい。水清ければ魚棲まずと言うが、彼はどこに棲んでも水を浄化する魚である。そして望チャンくらい、暖衣と飽食が人間の六根を鈍らすことを警鐘し、その減速制動を実践した人も少ないと思う。

ある晩、文法の勉強会が終了後、望チャンの家で鍋を用意しているから、一杯飲ろうとなった。先に行く望チャンの車を追って、私は喜道師と共に出発したが、どうしたわけか見失ってしまった。例によつて手帳を持たずに歩く私が、すぐごと朝霞へ引き返したことは言うまでもない。ここでも私と望チャンは、接続の悪いローカル列車の時刻表だった。

望道房日見大徳 四十一歳

平成六年一月十一日寂

（源立寺執事）

恵日だより



山門・トイレの修復を待つ源立寺全景

宗門側、修復工事をめぐる提訴を取り下げ

源立寺（菅野住職側）が

仮処分の裁判に実質勝訴！

源立寺の修復工事をめぐって、宗門側から提訴されていた工事続行禁止等仮処分事件は、十二月六日相手方が取り下げ、当方が実質的に全面勝訴した。

今回の事件は、兵庫県南部地震にともない、源立寺が一部損壊の被害を受けたのを機に、本堂・庫裏・山門・トイレ・塀等の修復工事を行っており、第一期工事として本堂・庫裏は順調に完了し、次で山門移設・トイレ改築・塀改修の工事を行っていたところ、突如、今年九月二十七日に源立寺代表役員を自称する佐藤慈暢（豊中本教寺住職）が工事続行禁止等の仮処分申請の提訴に及んでいったもの。訴えの趣旨は擯斥になって不当に源立寺を占拠中の菅野憲道が勝手に原状を変更する不当な工事を行っているとして、

- ① 工事予定地の執行官保管
- ② 工事続行禁止

- ③ 原状回復
- ④ ブロック塀の解体禁止

を求めるという内容。

事件は大阪地裁民事部で裁判官をはさみ、当事者・代理人出席の上、十月四日、十月十三日、十月二十七日、十一月十日と四回の審尋が開かれ、書面および口頭で当方の代理人、片井弁護士・仲田弁護士等から、先方の主張を一々に反論し、終始優位にすすめられていた。十一月十日の審尋の際、自分たちの不利を覚った佐藤慈暢（宗門側）らは、工事を一部縮小をするなら「人道的見地から工事を特別に承認する」等と和解案を示してきたが、当方はあくまでも判決を求め、裁判は十二月八日に終結、判決というところまで進行していた。

ところが、先方は敗色濃厚となったためか、六日になって一方的に訴訟の取り

下げに及んできたもの。

当方が一步も譲歩することなく、また何らの制約も受けずに訴えを退けることができたことは、実質的に当方の全面勝利であったといえる。

それにしても震災で修復中の工事を妨害するなど、宗門側には全く利益のない訴えを起こすことは、いよいよ宗門も悩乱してきたようである。

五年前に宗門側に返還された正蓮寺が、地震で全壊したことを、「正信会の者はろくに寺院の修理さえしないから」と、亡くなった岩瀬正山師に責任転嫁して、法華講の機関誌に宣伝しておいて、正信会の寺院が修復工事をはじめると今回のように妨害にかかるとのであるから、卑劣としかいいようがない。

阿部師らは機関誌『大日蓮』でもさかんに、阪神大震災が創価学会の謗法によって起こったなどと世迷いごとを述べて顰蹙をかっているが、今回また不当な訴えを起こしておいて、判決直前になって「……本件工事を承認することはできないが、特に人道的見地から取り下げる」などと虚勢をはって、取下書を提出し、

物笑いの種となっている。

さらに今回の事件は、最高裁判決確定以降、全国的に予想される正信会の寺院の修理をめぐる、同種のトラブルについて、一定の判断の方向が示されたことになる意義ある事件でもあった。

それにしても、嫌がらせとしか思えない今回の提訴に、宗門側の愚かで非人道的な体質を改めて思い知らされた事件であった。



昭和五十七年二月八日午前七時、創価学会の今井浩三弁護士（副会長）や青年部とともに控斥通知を持ってきた時の、佐藤慈暢師（中央）。

南近畿法華講大会開催

十一月二十六日（日）午後二時

第七回南近畿法華講大会が、十一月二十六日（日）午後二時から、阿倍野区広宣寺において開催されました。

今回の大会は、当初の計画では修復完了した源立寺を会場に予定していましたが、宗門側の非常識な訴訟によって、会場は急きょ、広宣寺に変更されての開催となりました。

当日はやや肌寒い曇天のなか、地下鉄御堂筋線の昭和町と西田辺の両駅、および会場への曲がり角には、整理班の人が案内に立たれていました。

司会は、源立寺の太田英治君と広宣寺の女子部の両名。高橋理事長の挨拶で、「伝えよう正法、託そう信仰」

のスローガンのもと、各講中代表の七名が順次登壇しました。

源立寺からは、服部地区の粟野広雅君が「法燈相続について」と題して発表しました。昨年の源立寺法華講大会で登壇



南近畿大会一司会は太田君

発表した経験から、落ち着きのある堂々とした話ぶりでした。

各講中代表の発表後は、西宮正蓮院の
主管・神屋正明師の講演（別掲）があり、
最後に記念撮影をして終了しました。

広基寺で御会式を奉修

さる十二月七日、能勢倉垣山中の広基
寺において、宗祖大聖人の御会式が如法
に奉修された。

法要は源立寺菅野住職の導師によって

進められ、献膳・読経、中西総代らの申
状奉読とすすめられ、晩秋の能勢山中に
ときならぬ唱題の法鼓がとどろいた。

終了後、檀中の心尽くしの饗応があり、
源立寺から参詣した講中もお相伴にあず
かり、昔に変わらぬ手づくり料理を楽し
んだ。

広基寺の檀中では毎年、前日から総出で
掃除や料理にあたっているが、今年の特
に早魃の影響で井戸が涸れ、山下から水
を担いでの準備となり、法華経の経文の
とおり菜つみ水くみのお給仕となった。

苦むして清掃の行き届いた境内に、数
少ない檀家で広基寺を守る皆さんの篤信
がしのばれる御会式でもあった。

原田知真房、晴れて教師に

さる十二月三日、岐阜県垂井の天奏寺
において、正信会主催の教師補任式がと
りおこなわれた。

これは、僧侶が出家得度以来、小僧・
所化と修行の年限を積んで晴れて教師に
任ぜられ、一人前の僧侶として初めて高



高座説法をされる原田知真師

座説法が許される新説免許式でもあり、
三世の大願とも称して僧侶としてもっと
も重要な儀礼である。

この日は所化小僧時代、源立寺に在勤
した原田知真房をはじめ四師が教師補任
式を迎えるため、当寺からは菅野住職・
尾林講師・橋本副講師が代表として参列
した。

式は午前十時から開会され、二番目に
登壇した知真房は所作も落ち着いて、音
声朗々と信解品第四の説法を行い、立派
に成長した姿を披露した。

なお後日源立寺でも原田知真師を講演
に招く予定であるから、いまからその日
が待たれることである。

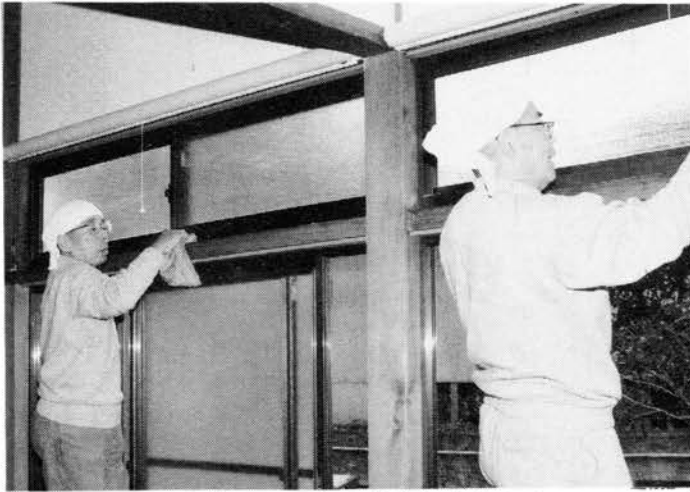
年 末 大 掃 除

十二月十七日(日) 午前十時

午前十時より読経・唱題、その後住職

より「百縁経」を引いて、掃除には、

- ① 自己の心の垢を除く
- ② 他人の心の垢を除く
- ③ 軽慢の心を治す



煩惱のほこりも落としました？

④ 自身の心を調伏する

⑤ 功德善根を積み善処にいたる

等の五つの徳がある旨の指導とともに、年末の忙しい時期に、多数の参集をいただいたことへの謝辞がありました。

総勢五十五名ほどの人員が、仏具磨き、外回り、すす払い、御宝前などに分かれ、午前中にほとんどの清掃が終了。昼食は法華講とお寺で用意したおむすび、煮込みうどんが供された。また、婦人部の有志による惣菜や、御宝前のリングをいただいで解散となりました。

幹事会 ニュース

一、関西正信連合会

さる十一月二十六日の南近畿法華講大会には、源立寺から五十三名の参加あり、盛会のうちに終了しました。(佐久間)

二、平成八年度年間行事予定表の報告

・第二十六回法華講総会は、五月十二日(日)に、本堂修復落慶式とあわせて奉修します。

・法華講全国大会は五月二十六日(日)に、東京の日比谷公会堂で開催されます。

なお引き続き、房総・鎌倉聖跡研修旅行が計画されています。二泊三日で、四十五名の参加募集がなされます。詳細は新年の合同役員会で打ち合わせされます。

・山門、トイレ修復工事は、四月初旬ころまでかかる予定です。これに関連して、四月までの行事(カルタ会、地区役員研修会、お虫払い、お餅つき、子供会、地区総会など)は、中止になりますので、恵日の予定表をよくご覧下さい。

・宅お講を一月半ばから受け付けいたしますので、お申込み下さい。(企画部)

紙面の都合により、「『弟子分帳』と十七回忌」(五)「ある創価学会員の妻の記録」(三)は、それぞれ次号に掲載致します。

【恵日俳壇】

〔山田 絢子〕

ほとほとと 散る山茶花の 垣根かな

〔宮下 留代〕

除夜の鐘 聞きつつくぐる 寺の門

初詣 法話楽しや 家族づれ

一月の行事

- 一日(月) 午前零時 元朝勤行会
- 一〜三日 十時・二時 正月勤行会
- 七日(月) 午後二時 広基寺初お講
- 十三日(土) 午後一時 初お講
- 十四日(日) 午後一時 初お講 (合同役員会)
- 十五日(月) 午後一時 成人式
- 二十八日(日) 午後二時 法華経講義

平成八年度 年回表

壹	周忌	平成七年
三	回忌	平成六年
七	回忌	平成二年
十三	回忌	昭和五十九年
十七	回忌	昭和五十五年
二十三	回忌	昭和四十九年
二十五	回忌	昭和四十七年
二十七	回忌	昭和四十五年
三十三	回忌	昭和三十九年
三十七	回忌	昭和三十五年
五十	回忌	昭和二十二年

恵日

平成八年一月号 通巻十一号
平成八年一月一日発行

編集兼
発行人

菅野憲道

恵日編集室

〒五六三 池田市槻木町一〇〇 源立寺内
TEL(〇七二七)五一一三三三五
購読料 定価一〇〇円(〒別)